

建具製造業

文化財の修復によって、今と未来をつなぐ会社

7-17 栄建具工芸

江戸時代からの技術にイノベーションを起こす

栄建具工芸は、代表である横田栄一氏が長野市で昭和42年に設立した、一般建具（障子、襖など）の製造を行う会社である。これまでに横田氏の下に弟子入りしたのは12名。現在は、5名の弟子が横田氏の下で働く。

栄建具工芸が得意とするのは、障子や襖に組子（くみこ）と呼ばれる釘を使わずに木を組み付ける技術を用いて、障子や襖に装飾を施す技術である。組子の組み合わせのパターンによって、様々なパターンのデザインが生み出されるが、例えば今回見せてもらった障子の組子は全て天然の木を使っており、染色は行っていない。だが、色の配置によっては、色鮮やかな障子になる。曲線も木とは思えない美しさだ。

また、同社では昔から寺院や神社等の文化財の修復の依頼も多く、近年では事業の7割程度を占めているという。文化財の修復を依頼され続ける同社の技術力の高さがうかがえる。



組子の加工が美しい障子

短期間で強制的に指導できるのが技能検定

同社では技能グランプリ・五輪にはできる限り弟子を出場させており、そのために技能検定合格は必須である。

その理由として横田氏は、「自身がフロンティアとしてこの業界を引っ張ってきたという自負を持って仕事をしている。弟子たちにも競技会等で優秀な成績を収めることによって、自身の仕事にプライドを持って欲しいと思っている。」と語ってくれた。

また、技能検定は指導者も受検者も短期間に技能の向上に強制的に向き合う絶好の機会だととらえている。「腕のいい職人さんには稼いでもらわないといけないので、指導する時間がどうしても少なくなってしまう傾向にあるんです。」と横田氏は語る。稼ぐためにも技術を仕込む時間が必要であり、意識的に指導者が若手に技術を仕込む時間として捉えられている。

文化財の修復をし続ける確かな技術力

文化財の修復を受けるようになったきっかけは、御霊屋（おたまや：先祖の霊や貴人の霊をまつる殿堂）の修復であった。この修復を行なったことが評判となり、以降、指定文化財や善光寺等の重要文化財の修復を行うようになった。どの建物も古いものであるため、増改築がされており、板が切れている場合がある。その際には足りない板に接木をしたり、修復できない際には復元するなど様々な技術が必要とされる。このような作業も技能士たちが手分けをして作業している。作業している技能士たちも、技能五輪の優勝・準優勝者、技能五輪の国際大会の出場者など日本で有数の技能を持った技能士たちである。

文化財修復の面白さについて横田氏は、「文化財の修復は、300年、400年たったものをもう一度見直し、次の修復を行う300年、400年後に伝えていくのが仕事なんです。『今が今じゃない。』そんな感覚があるのが面白いんです。」と語った。



修復作業の様子

育成は最初の数年で楽しいと思えるかが勝負

技能士の育成については、「長続きさせること」を重要視している。長続きさせるためにも、最初の2、3年が重要とのことであった。では、最初の数年で楽しいと思えるためにはどのようなことをしているのか。横田氏は、仕事を覚えるために積極的にどんどん作らせることにしているという。「要所で教えて、成功や失敗を重ねるとともに、仕事が面白くなってくる。仕事が面白くなると仕事を大切にする。その循環ができれば、後はほっといても勝手に育つんですよ。」と語る横田氏のその目は温かい。

栄建具工芸

➤業種：建具製造業
➤住所：長野県長野市
➤代表者：横田栄一

➤設立：昭和42年
➤従業員：5名＋1名（代表）
➤技能士：4名（延べ11名）

技能士へのインタビュー

横田 栄一氏（69 歳） 1 級建具製作技能士

松林 節男氏（56 歳） 1 級建具製作技能士

父親の影響で木工をはじめて弟子入りしたが

代表である横田氏は、中学校を卒業後職業訓練校で木工を学んだ。木工を選んだのは横田氏の父が江戸指物士（板と板、板と棒をホゾ組みにて組み合わせて作り上げる木工職人）として働いていたからだという。卒業後、8 年間、親方の下で修行した。この親方が 60 歳を目前に初めてとった弟子が横田氏であった。この親方、横田氏いわく「腕は確かで追いつかないと思ったが、仕事あまり好きではなかった。」とのことである。このため、横田氏は、自分が動かないとお客さんの注文が止まってしまうことももあり、親方を助けるために製作に加えて、お施主さんとの交流も積極的に行った。

その後、独立して自分の会社を持つことになる。このときには、修行時代に培われた営業力・技術力によって経営を軌道に乗せていく。また、横田氏自身が手探りで技術力を高めてきたこともあって、後進の指導には力をいれた。

平成 11 年には、黄綬褒章（第一線で業務に精励している者で、他の模範となるような技術や実績を有する者へ与えられる褒章）を受章した。そして現在では、全国伝統建具技術保存会の会長等、業界のけん引役として活躍し続けている。

視野を世界に広げられた国際大会

独立後にとった一番弟子が、現在も栄建具工芸で横田氏を支える松林氏だ。松林氏は 1 級建具製作技能士であり、平成 19 年にはものづくり日本大賞内閣総理大臣表彰も受けている。この松林氏が、初めて技能五輪の全国大会に出場したのが昭和 49 年。優勝を果たした松林氏は、国際大会への切符を手にした。この国際大会で横田氏は、「日本人は手先が器用だから、国際大会でも十分通用すると思っていたが、世界には非常に腕が立つ建具職人がいることを思い知らされた。そして、我々はまだまだ力不足だと気付いた。」という。



松林氏

内外のネットワークづくりのトップランナー

横田氏は 1 級建具製作技能士であるとともに、長野県の建具技能士会を設立したメンバーでもある。

技能士会を作ったきっかけとして「この業界は建築の中では弱い立場です。そして、外との交流もあまりありませんでした。外との交流がないと独りよがりな仕事になってしまいます。業界内で仲間を作り、交流をすることによって、情報を交換したり、困ったときに融通し合う。そんな関係が作りかったのです。」と語る。

さらに、建具組合の青年部や全国伝統建具技術保存会の設立メンバーでもある。文化財の修繕をきっかけに建築業界の人たちとの交流も増えた。このように、横田氏は建具に加えて、建具以外の建築に関わるあらゆる人たちの交流を大切にしている。

職人でありながら、このような取組を非常に熱心に続けてきたのはなぜだろうか。この問いに対して横田氏は、「外を向いていないと自分の進歩はありません。門戸を開けて、風が吹いてくるようにしないとダメです。様々な人と交流することで新たな風を得るためには、自分もそれだけ魅力的であり続けなければなりません。外部との交流は、自分を見直し、自分を磨き続けるために必要なものです。」と語った。



横田氏の作業の様子

若者が夢を持てるように

今後について、横田氏は「やはり後継者の指導でしょう。特に若者に夢を与えたいです。技術があれば、何かが生み出せる。何かを生み出す力を持つことによって、夢を持って欲しいと考えています。」という。そのために、依頼があれば全国津々浦々、どこにでも指導に赴いているという。横田氏のパワーはとどまるところを知らない。